潮風

MEIKAI UNIVERSITY

平成14年1月20日発行（年2回刊）
〈教育後援会だより〉
しおかぜ
発行／明海大学浦安キャンパス教育後援会
〒279-8550　千葉県浦安市明海8
電話　047-355-5112　FAX　047-355-5117

新春対談

国際交流の進む明海大学
真の相互理解のために、今必要なことは

明海大学ではたくさんの国や地域から留学生を受け入れている。2001年5月1日現在の本学の在学生は、学部と大学院・研究生合わせて8059名。うち外国人留学生が471名で、留学生の受け入れ数としては、全国の私立大学の3番目。17人に1人が外国人留学生ということになる。学生の自治組織である学友会の中には「留学生連合会」があり、留学生間だけでなく、日本人学生や地域住民とも活発な交流活動を展開している。「国際交流」をキーワードに、教育後援会と学友会、留学生の代表が対談を行った。

せっかくの留学 日本人学生と交流の機会を 増やしたい

山内：まず、留学生連合会のイフラーズ会長にお話を伺いたいと思います。交流会、体育祭、地域社会との交流など、いろいろと活動しているようですが。

イフラーズ：交流会は毎週木曜日、学生ホールのミーティングルームで、各国の留学生が自分の国を紹介するという形でやっています。例えば文化、料理、観光地などを紹介します。

留学生だけでなく日本人の学生にも呼びかけて参加してもらっています。文化の紹介を通じて、日本人学生と仲良くなる機会があるとよいのではないかと考えたからです。せっかく日本に来ているのに留学生が日本人学生と交流できなかったら何の意味もない。だから、毎年開催されている留学生の体育祭やお月見パーティーも、今年は日本人学生に参加してもらいました。

中田：日本人学生の参加は多いですか。

イフラーズ：まだ少ないですね。告知の方法や場所などを検討してみる必要があるようです。

山内：学内の交流会から始まって、地域社会との交流も積極的に進めておられるようですが。

イフラーズ：留学生連合会の会長となる前から、個人的に地域との交流を行っていました。会長になってからは、ほかの留学生にも機会を与えたいと企画を考えています。10月には浦安市内の小学校で、交流の機会を持ちました。

地域交流をすることで新しい出会いもあります。地域の人たちと仲良くなるだけでなく、自分の将来の道を広げることも多いです。留学生も地域の人たちと交流をした方がいいと思っています。

酒井正幸副会長

中田：地域の人たちとはどんな人たちですか。

イフラーズ：明海大学の近くにある小・中学生、高校生、福祉センターの障害を持つ人たち、それからガールスカウトなど地域で活動している人たちです。

中田：日本人でさえ、あまり地域に入らないのに、外国人留学生の人たちが地域に入っていくということは、より日本を知ってもらえることになる。素晴らしいことだと思います。

イフラーズ：日本に来ている留学生は、みんな日本が好きで来ていると思う。だからその間、勉強だけに集中するのではなく、もっと地域交流を図ることで新しい出会いとか考えが出てくるのではないでしょうか。

中田俊一教育後援会会長

イベントをきっかけに日本人学生と 留学生の距離が縮まった

山内：国際交流を積極的に行っている留学生連合会に対して、学友会はどう関わっているのでしょうか。

小野：これまでの学友会は、日本人と留学生の間に距離があったようで、交流が少なかったというのが正直なところです。でも、今年度の会長のイフラーズ君は日本のことをよく理解している人で、イベントなどで協力し合うことはスムーズにいったと思います。

12月にイフラーズ君が地域の人と学生と留学生が世界の平和について語るという「ワールド・ピース・フェスティバル」を企画しました。急に出てきた企画ですが、地域の方たちもたくさん来てくれて、成功したと思います。

中田：学友会と留学生連合会は交流の機会が少なかったようですが、夏の合同のサマーキャンプがよかったのかも知れないですね。

小野：今年は留学生ともよく会って話しをしましたね。

イフラーズ：大学も本当に協力的でした。だから活動も幅広くできました。

ダグラス：日本語を勉強するということは、地域の人とともに生活して学ぶことも大切なので、大学で授業を受けるだけではなくて、一緒に活動したり、参加することも必要だと考えます。

山内薫副会長

山内：ダグラスさんは男子のラクロス部に所属しているそうですが、スポーツを通じて交流を行っているようですね。

ダグラス：明海大学に来たばかりの頃、留学生の活動はどんなことをしているか全然分からなくて、積極的にやらないと日本人と交流はできないと思い、初めからクラブに入ろうと決めていました。初めは交流のつもりで入ったのですが練習しているうちに、勝ちたいという気持ちが強くなって、今熱くなっています。

山内：日本人の学生で、留学している方もいらっしゃるようですが。

大塚：私が語学研修に参加したのは、大学で1年間過ごして自分の語学力に疑問を持ったのがきっかけです。実際1か月間の短期留学だったので、楽しい思い出の方が多かったです。

中田：明海大学にはたくさんの外国人留学生が来ているわけだから、日本人学生は留学しなくてもみなさんの話しを聞けば海外体験ができるわけです。恵まれた環境にいるわけだから、チャンスを活かしてほしい。ぜひ、シャイな日本人を誘ってください。

大塚博行副会長

（2面へ続く）

新年のごあいさつ

夢をもって未来へ翔け、明海生

教育後援会会長　中田俊一

教育後援会会員の皆さまには、希望に満ちた新春を迎えられたこととお慶び申し上げます。また、年間事業計画による後援会活動にご対しまして、温かいご理解とご協力を賜わり、厚く御礼申し上げる次第です。

昨年、明海大学は30周年記念館のオープン、きめ細かなカリキュラムの提供、事務組織の改組など、ハードとソフトの両面で一段と魅力ある大学づくりに取り組まれ、力強いものが見られました。明海生も勉学、留学、サークル活動などに精力的に取り組み、キャンパス全体に活気が満ち溢れているのが感じられます。

さて、経済のグローバル化が進む日本は今、厳しい競争社会です。私は後援会活動をとおして、日ごとに厳しさが増していることを痛感します。一つに、後援会奨学金の申請件数が急に多くなり、その理由が父親のリストラです。さらに大学では年間、数百人規模で退学者が出ているとのことで、経済的理由の他、学生自身の心の面で問題があり、事態は深刻です。

経済競争が多くの失業者を生み、優しさと思いやりが欠如した社会風潮が少数の学生の話とは言え、進む道に迷いをもたらしているようです。学生の心の悩みは、本人の心構えや家庭環境なども絡むので複雑化し、増加の傾向だと言います。

いずれにせよ、経済不況からの脱出、心を大切にした人間優先の教育、すべての人がもっと大らかに生きていける社会システムの構築などの対策が必要ではないでしょうか。

一方、経済的に恵まれ、心も身体も元気なのに、勉強もしない、マナーも悪い無気力な学生への対応ですが、本人の自覚を促すよう、大学が今後も厳しく指導していただければと思います。唐突な例で恐縮ですが、勉強したくても時代が許さず、戦場に散った、沖縄のひめゆり学徒の悲劇を思えば、大学で勉強できることはいちばん、幸せなことだと私は思っています。

検討したい、学生支援

2002年の教育後援会のスタートは、浦安キャンパスの「改革プラン2002」を点検し、後援会事業の一部見直しが必要なのか議論することです。改革プランとは、「完全フレックス制」の導入、教育課程の抜本的再編、海外留学支援プログラム、学生支援の四つが柱となっています。

私は、その中の海外留学と学生支援を役員会で、取り上げたいと考えています。

もうすぐ、三月の卒業式です。私は卒業生にこう御祝い申し上げたいと思います。「人はそれぞれ違った生き方でいい、幸あれ」と。それは今の社会が理不尽なことや予測できないことが多く、人生に勝者も敗者もないという私の気持ちです。

最後に、教育後援会は今年も大学の発展を願い、学生支援に全力で取り組みますので、会員の皆さまの一層のご支援をお願いします。

日本人学生も積極的に地域と交流すべき

イフラーズ：明海大学には一般の方も利用できるメイカイクラブがあります。ここは手軽に交流できる場だと思います。ここでの出会いをきっかけに、日本人7人をスリランカに連れて行くことができました。

山内：国と国との橋渡し的なことまでやっておられるわけです。親善大使のようなものですね。

イフラーズ：スリランカ人と日本人という壁があると何もできない。言葉は交流するための壁ではないと思う。自分から積極的に進めていかないとダメ。

留学生だけでなく、できれば日本人学生と一緒に地域に出て、交流することができたらと考えています。私の個人的な意見ですが、日本人の学生は勉強と就職活動に気持ちが集中しているように思います。現実の社会とはどういう所なのか、見ていない。現実に社会に出る前に地域と交流することが大切だと思うんです。そうすれば、「こういう社会に私たちは出ていくんだ」、「社会に出てこういう人たちと対応するんだ」ということを身につけられる。日本人学生も大学から出て地域と交流すべきです。

中田：日本人の学生も地域に出ないけれど、われわれ大人も地域に出ていない。仕事中毒のところがあって、仕事に一生懸命。そんな親に育てられているから、子どもたちは地域に出たがらないのかなぁ。

大塚：積極的な方はいいと思うんだけれども、外国人でも日本人の学生でも、友達が作れなかったり、地域への一歩が踏み出せなくて勉強や就職活動だけで終わってしまう人もいると思うんですよ。そういう人たちと仲良くするためにはどういう方法があるのか、みんなで考えてほしい。できることがあれば教育後援会でもお手伝いしたいし、いろんなことを企画して実行していってほしいと思います。

大切なのはお互いを理解する気持ち

山内：それでは、少し話題を変えて、国際交流はなぜ必要なのか、みなさんの考えをお聞かせください。

イフラーズ：人と交流するということは、相手の意見に耳を傾けるということ。自分がいつも正しいとは限らない。相手のことに耳を傾ければもっとうまくいくのではないでしょうか。

それから、他の国の文化に触れることによって、自分の国でもこういうことをやってみたらいいのではないかと参考になる。自分の活動を広げていくことができると思う。

ダグラス：人間と人間が分かり合えなくてけんかになったりする。それは、人間がみんな同じだと思っているからではないか。同じ歳だから、同じ事を考えているだろうと思うところで勘違いしたりする。

例えば、同じ20代でもオーストラリア人と韓国人は違う。自分は軍隊の経験はない。国際交流をしてその国の文化や社会的な背景を知ってはじめて、相手を理解することができるんじゃないかと思う。

大山：今の二人の話を聞いてすごく感動しました。自分の中に10個の箱があるとしたら、ほかの国の人と知り合うことで20個になり、多角的な視野を持った人間になれるのだと思います。お互いを成長させる場となるのが国際交流だと思う。

小野：私は明海大学で初めて日本人以外の友人ができました。初めは日本語がうまくなかったけれど、相手を理解する気持ちさえあれば、言葉なんか自然に通じてくると思う。明海大学で留学生たちと、仲間として一緒に活動できることを誇りに思っています。大事なのは相手を理解する気持ちだと思います。

中田：社会がグローバル化して、世界の国々が交流しないと経済が成り立っていかない時代です。その意味で言えば国際交流は、人間が生きていく上で大切な事になってきたのかも知れない。特に日本は資源も食料も自給できない国だから。

そんな中で、将来、明海大学で国際交流の大切さを身につけた人が社会人になったときに、紛争のない、経済摩擦のない世界ができるのかも知れない。だから留学生だけでなく、日本人学生もがんばってほしい。教育後援会もサポートしなければいけないと思う。

酒井：日本は島国で、意外と開かれていない部分が多い。留学生のみなさんに日本の文化や日本の仕組みを見てもらい、悪いところは悪いと指摘してもらえると日本にとってありがたい。

大塚：みんなが安心して暮らせることは地球上のすべての人の願い。それには文化を超えて理解し合うというのは大事なことだと思う。明海大学はたくさんの数の留学生を受け入れている。

小野和美
（経済学部経済学科3年）
2001年度浦安キャンパス学友会副会長。今年度の新入生オリエンテーションでは、クラスミーティング・学内見学ツアーへ学友会課外活動団体の学生250人を動員。また、8月に従来のリーダース研修会と留学生サマーセッションを一体化させた学友会サマーキャンプを実施。

アジュアール・アルファーシー・モハメッド・イフラーズ
（経済学部経済学科3年）
2001年度浦安キャンパス学友会留学生連合会会長。スリランカ出身。8月の学友会サマーキャンプ、10月のお月見パーティー、そして12月にはワールド・ピース・フェスティバルといった行事を積極的に企画・実行し、留学生と日本人学生、地域住民、団体などの理解と交流を深めることを推進。

大山はるか
（外国語学部英米語学科3年）
2001年度浦安キャンパス学友会卒業パーティー実行委員会副委員長、小原流生け花サークル部長。2000年8月、イギリスのシェフィールド・ハーラム大学で1か月間の語学研修に参加。2001年夏のインターンシップで、新東京国際空港に勤務。

ダグラス・イアン・フット
（外国語学部日本語学科
特別聴講学生）
男子ラクロス部に所属。セントラルクインズランド大学（オーストラリア・ロックハンプトン）からの特別聴講学生第3期生として2001年3月来日。1997年に1年間、鳥取県の県立高等学校に留学経験をもつ。

4年間を振り返って

椹村陽子（日本語学科）

3年生まで在籍していた学園祭実行委員会では、大きなイベントに携わることができた喜びと、学園祭が終了した時のなんとも言えない達成感を思い出します。2年生の時に一度辞めようかと思いましたが、もう一度ちゃんと結果を残そうと思い、3年目も続けることにしました。この時は先輩がいなく『自分でやろう』というプレッシャーに何度もくじけそうになりましたが、友人や後輩に支えられて終了。今では充実感いっぱいの、とても思いで深い学園祭になりました。

卒業するにあたっては、卒業する寂しさより、4年間暮らし生活した寮を離れなければならないことがとても寂しく思います。

卒業後は実家の茨城に帰り公務員試験の勉強をします。

潮田知之（経済学科）

1年生の時は、どこにも所属することなく過ぎて行きましたが、2年生の時に友人と情報処理研究会に入部しました。また、3年の時には学術文化連合会、4年では卒業パーティー実行委員会に所属し、多くの友人と出会いました。部活に所属していなかったら、これだけ多くの人たちと知り合うことが出来なかったと思うので、色々な部活を経験し良かったと思います。

卒業後は、流通関係のシステムエンジニアとして就職する予定ですが、就職活動は精神的に辛かったです。5月に祖母が他界し、しばらくの間は就職活動ができない時期があり、友人が内定を決めていくなか、中々決まらないことにプレッシャーを感じていました。しかし、今では内定をもらい、祖母の仏前に報告できてよかったと思います。

明海大学での体験を活かし国際社会で活躍してみたい

山内：それでは最後に、新年に際して、みなさんの夢を聞かせてください。

イフラーズ：せっかく日本に来て日本人と交流できたのだから、日本とスリランカの間で仕事ができればと思う。それから明海大学にはとてもお世話になったので、大学のためにも何かできればいいと思います。

ダグラス：私は明海大学のおかげで、浦安市内の小学校で教育実習をさせてもらいました。小学生に強い影響力を与えられる立場になって、すごく責任を感じました。もちろん社会に出ている人との交流も大切だけれど、子どもは自分の親や先生に言われたことしか知らないわけで、うまく子どもたちとも交流できれば、いい結果が出るのではないかと思います。

大山：私は明海大学で異文化コミュニケーションの勉強をしています。入学前から航空業界で働きたいと思っていたのですが、やはり留学生たちとたくさん話しをしていて、「空港」という日本の玄関・窓口でいろいろな国の人をもてなす仕事をしていきたいと、改めて思いました。

小野：私はほかの3人と比べると、学友会の仕事をとおしての国際交流しかやっていませんが、人と人との関係づくりが大事ということは感じています。人と積極的に付き合っていくという向上心をなくさない人間でいたいと思っています。

山内：有意義なお話しをありがとうございました。これを機に私たち教育後援会も国際交流に力を入れていきたいと思います。今日はありがとうございました。

（2001年12月20日、新浦安オリエンタルホテルにて）

2001年度 地区懇談会

本学の発展を目指して 父母と教職員が交流 今年も4地区で開催

大学も結果責任を問われる時代 学長らが本学の改革について報告

父母と大学の先生方が、一堂に会し、親しく懇談できる場をつくろう―と1994年度にスタートした「地区懇談会」が、今年も関東、東北、東海、北陸の4カ所で開催された。今年は7回目の開催となり、318人の会員が参加。互いに交流を深め、有意義なひとときを過ごした。

今年の地区懇談会は、9月23日、浦安キャンパスを会場に関東地区からスタート。以降、10月7日北陸地区、10月13日東北地区、11月11日東海地区で、それぞれ開催された。

高倉翔学長、成瀬隆副学長らを迎えて行われた東海地区懇談会は、酒井正幸教育後援会副会長のあいさつでスタートした。酒井副会長は、就職対策セミナーへの援助、留学制度の支援など、本年度実施されている教育後援会の事業について説明し、さらに本年度から導入されているクラス担任制など、学校側の学生支援にも積極的に協力していくことを述べた。そして、「日頃、子どもたちから、大学生活について相談を受けていると思います。感じている疑問や要望などを、先生方にぶつけていただきたい」と結んだ。

次いで、大学側を代表して髙倉学長があいさつ。18歳人口の減少に伴い、どこの大学でも学生確保に苦慮している実状に触れ、「大学も結果責任（アカンタビリティ）を問われる時代になってきた」と話した。本学では、良質の教育サービスを提供することが、学生やスポンサーである保護者に対する責任ととらえ、「カリキュラム改変や、学生に対するサポートシステムを充実することで、アカンタビリティを果たしていきたい」とスピーチした。

続いて成瀬副学長が、今年度からスタートしたクラス担任制や、学生相談の充実、学生支援のシステムなど、大学の近況について詳しく報告した。

その後、本学の教授による講演が行われた。東海地区では不動産学部教授で就職委員長である武田公夫先生が「これからの進路と学生生活」をテーマに40分ほど講演した。

武田先生は、「完全失業率が5・3％という時代に突入し、企業では裁量労働制など成果主義が導入される傾向がある」と分析し、「自分に合う仕事に就ければいいが、合わない場合は地獄の苦しみ。就職する際は、自分に合った企業を選ぶことが大切」と話した。実際、入社3年以内に会社を辞めてしまう人は20％もいるという数字が出ていて、「自己分析をしっかり行い、適職を選んでほしい。そのためにはお父さん、お母さんを含めた先輩たちの経験談がよいアドバイスになる」と述べていた。

後半は個人面談が行われ、父母と学科担当教員が、成績や進路などについて、熱心に話し合った。就職指導、学生支援室の相談コーナーも設けられ、学生生活全般にわたる相談を受けた。

第2部はおいしい料理を囲んでの懇親会。会場には話の輪がいくつもでき、なごやかに歓談する姿が見受けられた。父母と教職員が相互に交流を深めることができた。

最後に来年の再会を誓って宴はお開きとなった。

突然のスピーチに 会場から祝福の拍手！

東北地区の会場では福山事務長の提案で、4年生の子どもを持つ父母からあいさつをいただいた。「4年間お世話になった。娘がニュージーランドに留学した時に何度目かの新婚旅行にも行かせてもらえた。娘は大学を通じて色々な海外に行く事ができ有意義に過ごせました。ありがとうございます」「来年はこの会場に来られなく残念。いい大学に入って良かったと思います」「毎年出席していました。明海大学にはお世話になりました」と、卒業の喜びを話す父母に、大きな祝福の拍手が送られた。

最新設備の図書館を見学

関東地区懇談会

浦安キャンパスで開かれた関東地区懇談会では、昼の休憩時間を利用して、今年オープンした新図書館を見学した。

職員の案内で、まず広々とした閲覧室に。真新しい書架に並べられた書籍や、約800種類の各国の学術雑誌が圧巻。インターネットによる情報検索や、ビデオ、オーディオなども視聴できるマルチメディア・ライブラリーも興味を引いたようだった。

参加した父母は、「すばらしい設備の図書館で、びっくりした。まだ、書架に余裕があるようなので、もっと蔵書を充実させてほしい」と感想を話していた。

〈参加者の感想〉

（関東地区）
・大学の中をもう少し見たかった・大学側の方針などを聞くことができ良かったと思う・思ったより多くの人が参加しているのにはびっくりした・父母の人数が少ない・講演の内容が良かった。

（北陸地区）
・大学側が父母に向い合う姿が素晴らしい・有意義な講演だった・初めての参加で、堅苦しいかと思っていたが、ユーモアあふれる講演で救われました・有意義な時間をもてた事に感謝します・回を重ねるたびに顔見知りになれ、連帯感に近いものを感じます。

（東北地区）
・大学の様子が少しでも分かり参加して良かった・子どもを預ける親の立場として安心しました・講演会が良かった・初参加で緊張しましたが、大学が身近に感じられました。

（東海地区）
・出席者が少なかった・1年なので就職についてあまり考えてなかったが、話を聞いて現実味をおびてきた・大学の事がわかり参加して良かった・個別面談は大変良かった。

2001年度 地区懇談会

○**関東地区**　9月23日（日）
浦安市「明海大学浦安キャンパス」参加者181人
▽講演／外国語学部・江口昌克助教授
「大学生の将来像と家族について」

○**北陸地区**　10月7日（日）
新潟市「オークラホテル新潟」参加者49人
▽講演／外国語学部・宮澤嘉夫教授
「望ましい学生像とその生活」

○**東北地区**　10月13日（土）
福島市「福島ビューホテル」参加者56人
▽講演／経済学部長・平井源治教授
「構造改革と日本財政」

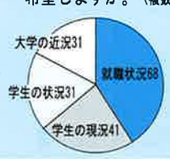
○**東海地区**　11月11日（日）
静岡市「ホテルアソシア静岡ターミナル」参加者32人
▽講演／不動産学部・武田公夫教授「これからの進路と学生生活」

地区懇談会参加者アンケート内訳

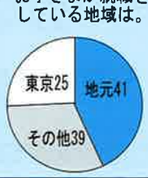
回収数105（北陸34・東海26・東北45）
＜お子さまの学科＞
経済46・不動産25・英米語17
中国語1・日本語16
＜学年＞1年32・2年16・3年32・4年22・無記名3

1．広報紙「潮風」及び「Ｍｅｉｋａｉ」を読んでいますか。
毎回読む66・時々読む24・見出しを見て読む13・読まない2

2．大学からどんな情報を希望しますか。（複数回答）



3．お子さまが就職を希望している地域は。



4．お子さまとの話ではどんな話題が多いですか。
・就職・友達関係・授業の内容・サークル活動
・アルバイト・卒業後の進路・資格取得・留学

5．大学に関しての要望は。
・就職する時、即戦力になるような力をつけてほしい
・知名度及びレベルアップ・希望の多い授業数の増加
・学部、学科ごとの現況を知りたい・就職のアドバイス
・他大学にない特殊な講座の拡充・資格取得の強化
・スポーツの部活を積極的に作ってほしい・中退防止策を
・今後ますます内容が充実し発展してほしい

6．教育後援会に期待することは。
・他大学の後援会に比べてもとてもよく活動していると思う
・サークル活動の報告を・就職支援に力をいれてほしい
・各県単位での集会・資格取得のための援助
・少子化時代にあって学生獲得の最大応援団となるべき
・学生のニーズに対応した援助を期待します
・キャンパス内の様子を少しでも多く知りたい
・卒業生からの一言アドバイスを広報誌に掲載してほしい

関東地区懇談会参加者アンケート内訳＜2年次対象＞回収数114

経済42・不動産35・英米語18・中国語12・日本語7・無記名1

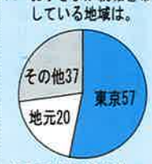
1．広報紙「潮風」及び「Ｍｅｉｋａｉ」を読んでいますか。
毎回読む47・時々読む38・見出しを見て読む27・読まない2

2．大学の情報に満足していますか。
はい77・いいえ18・無記19

※「いいえ」とお答えした方へどんな情報を希望しますか。
・早めの情報がほしい・就職関係の情報をもっと詳しく
・不登校学生を見捨てないでほしい・厚生施設等の案内
・できるだけ学生の実情や実態をタイムリーに知らせてほしい
・履修状況や単位取得状況を半期ごとに親へ通知してほしい
・留学する前にその国の大学施設がどのようになっているのか知りたい

3．教育後援会に期待することは。
・現在と同様の活動を・懇談会を多く持てるよう期待します
・学生に対する助成を活動の最重要目標としてほしい
・奨学金制度の充実・大学に対しての代弁者に（学生・父母の要望など）
・具体的な就職関係の記事を掲載してほしい
・父母と大学の関係を深め、中退者の出ないような大学になれば

4．お子さまが就職を希望している地域は。



※その他28の多くは、2年なのでまだ未定。

5．お子さまと大学について話をすることがありますか